

# 重要文化財 <sup>しょうまんいん</sup> 勝鬘院塔婆保存修理工事について

上席研究員 古荘 貴也

## 1. はじめに

重要文化財勝鬘院塔婆は、平成31年2月から令和2年9月にかけて、保存修理工事が行われた。当協会では、この保存修理において工事の設計・監理を行ったので、その概要について報告を行う。

## 2. 勝鬘院の概要

勝鬘院は大阪府の大阪市天王寺区夕陽丘町に所在する和宗の寺院で、本尊に愛染明王を祀る。

勝鬘院の各建物は、南から順に山門、中門、本堂（大阪府指定有形文化財）、多宝塔（重要文化財）が中心軸上に並び、いずれも南面して建つ。

勝鬘院は荒陵山と号し、聖徳太子が四天王寺内に設置した施薬院が前身という。また、聖徳太子が勝鬘経を講じたことから、勝鬘経講讃の旧跡と伝えられている。

## 3. 塔婆の概要

塔婆は本堂後方にあり、銅板銘に慶長2年(1597)再建とある。初重平面は三間四方の多宝塔で本瓦葺。内部は四天王柱を立て、後ろの2本を来迎柱とし、据え置き型の仏壇を置く。初重は出組とし、大斗、杵肘木を受け、二軒繁垂木とする。二重は尾垂木付4手先組物とする。円形に配置した柱に大斗、秤肘木を組み、組物の手先を放射状に延ばし、2軒繁垂木とする。

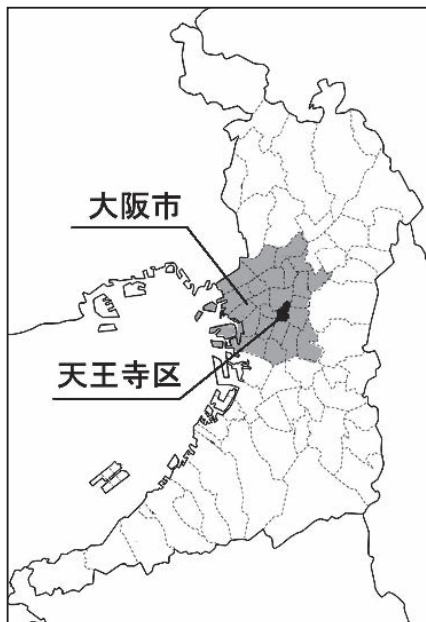


図1 勝鬘院位置図（大阪府）



図2 修理前、西面

臺股に12支を彫刻し、内部の四天柱や来迎壁に彩色の仏画があり、大阪市内最古の木造建造物である。本尊は大日大勝金剛尊を奉っている。

勝鬘院塔婆は明治40年に、銅銘板は昭和39年に重要文化財に指定されている。

慶長2年の再建後も数度の修理が行われており、瓦の刻印から確認できるものでは寛文10年(1610)、昭和11年(1936)に修理が行われている。昭和11年には半解体修理を行っており、解体中の写真および保存図が残されている。

#### 4. 構造形式

##### ①構造形式

三間多宝塔、本瓦葺

附 銅銘板 1枚

##### ②主要寸法

区 分	適 用	寸 法
桁 行	桁行両端柱間真々	6.448m
梁 間	梁間 ”	6.448m
軒 の 出	側柱真より茅負外下角まで	2.610m
軒 高	柱礎石上端より ”	5.112m
棟 高	” 棟頂上まで	10.881m
平 面 積	側柱真内側面積	41.577m <sup>2</sup>
軒 面 積	茅負外下角内側面積	240.436m <sup>2</sup>
屋根面積	平葺面積	265.793m <sup>2</sup>

#### 5. 工事概要

勝鬘院塔婆は、平成30年9月4日発生の台風21号の暴風雨により、塔婆各所に被害が生じたため、災害復旧事業を平成31年2月から開始した。また、前回の修理工事から80年余りが経過しており、屋根瓦や土壁、金物等の汚損、破損が生じていたため、災害復旧工事と並行して一般修理事業を令和元年9月から開始した。事業は令和2年9月までを工事期間、令和2年12月までを事業期間としている。

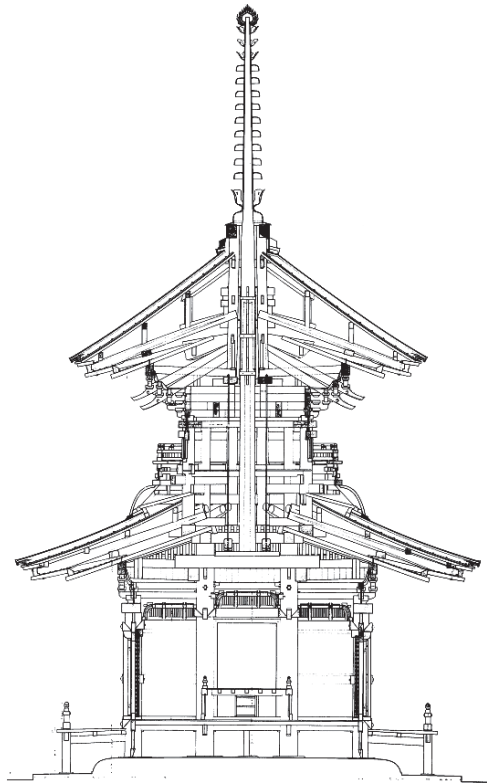
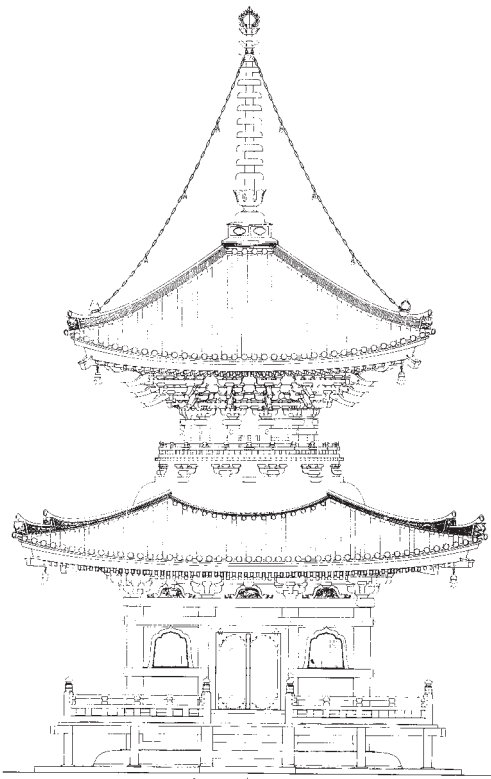
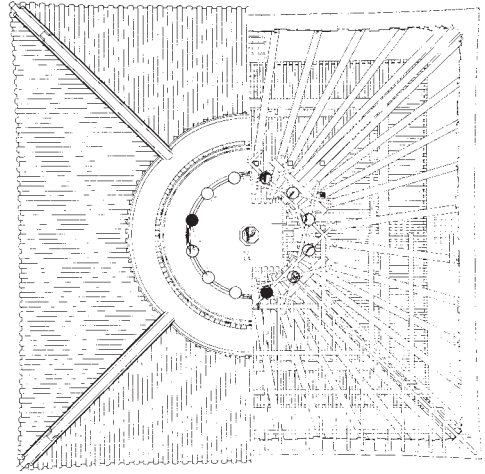
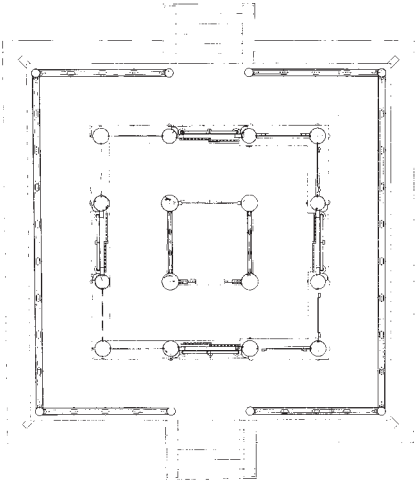


图3 保存図、昭和11年

## 6. 修理概要

屋根本瓦葺は、上層下層共に隅棟の棟積瓦が全て崩落しており、平瓦も各所で破損していた。上層と下層の間にある亀腹は下層隅棟の取付き部分周辺が、棟積と一緒にめくれ、荒壁まで露出していた。上層隅棟先端に取り付く宝珠は、全部で4箇所のうち3箇所で棟積と一緒に外れており、相輪は東側にわずかに傾斜していた。

相輪、宝珠、下層建具や勾欄及び長押等に取り付いている飾り金物は、全て錆が発生し、塗装が落ちており、風食のために穴が空いているものもあった。

これらの破損状況から以下の修理方針とした。

- ①屋根瓦の葺き替え 本瓦葺きは全て葺き替える。既存瓦の強度や欠けの有無を確認し、できる限り再利用して葺き直す。
- ②亀腹の塗直し 棟積廻りの補修と、上塗り漆喰を全面塗り直す
- ③相輪の建て直し（傾斜の修正） 真柱に被さっている水煙等の相輪金物を取り外し、真柱を垂直に立て直す。
- ④金物の補修（相輪、宝珠、長押、建具、高欄）金物は全て取外し、錆を落とし、塗直しを行い、穴の空いたものは旧材に倣って新調する。

## 7. 工事内容

### (1) 屋根工事

本瓦葺きを解体し、野地の破損箇所を補修し、空葺きで葺き直す。隅棟は上層、下層ともに全て葺き直す。

野地はおおむね健全であるが、傷んでいる部分は土居葺きから補修する。昭和11年作成の瓦は上層、下層共に南面（正面）と西面に集められており、隅廻りや熨斗積等も変えられていた。

軒唐草の紋様は10種類以上あり、大きく分けると次の5時代に分類でき、おおよそ70～100年周期で葺き替えられている。数量の割合は当初：1%、寛文10年（瓦に刻印有）：8%、幕末：13%、幕末以降：6%、昭和11年：72%であった。また、昭和11年の瓦は当初と思われる瓦を模して作られており、本工事での補足瓦も昭和11年と同様の紋様とした。

### (2) 左官工事

亀腹と上層小壁の上塗補修を行う。上塗をこそげ落し、中塗を直し、上塗漆喰を塗り直す。中塗は砂漆喰を用い、上塗は白漆喰仕上げとする。



図4 軒唐草

### (3) 木工事

相輪は風圧により東に傾斜していた。真柱は下層天井上の梁にダボを介して立てており、露盤で屋根と接しているが、露盤ごと動いたため傾斜が生じていた。そこで、露盤及び相輪を解体し傾斜を修正する。

### (4) 金具工事

相輪、風鐸、長押鋸、建具鋸及び勾欄鋸の塗装直しと、一部補足を行う。やすりで丁寧な錆落としを行ったうえに、錆び止め塗装し、フッ素樹脂塗装を行う。大半は再用可能であるが、建具鋸の唄等のように厚みが薄く割れているものは新調とする。

上層隅棟先の宝珠は、野隅木にボルト締めした金物に固定されていた。古写真によると昭和11年の工事前は矩形の鋼材を野隅木に刺しているが、昭和11年の工事でねじ切りを施した丸鋼とU字型金物に替えていることが分かる。今回の台風では、U字型金物の外気に触れる部分が経年劣化により断面が細くなっており、相輪鎖に引っ張られて破損に至った。本工事ではU字型金物の破損部分を溶接して旧規に復する。

## 8. おわりに

本稿作成にあたり、勝鬘院及び工事関係者の皆様には大変お世話になりました。この場をお借りして御礼申し上げます。

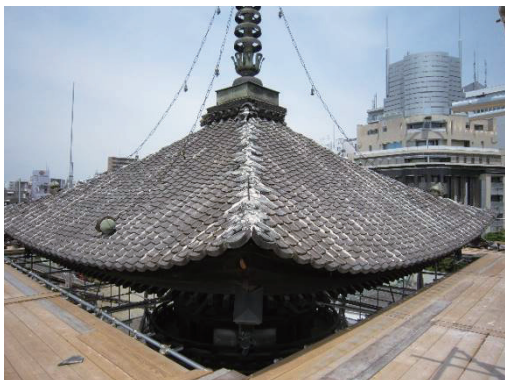


図5 修理前、上層、隅棟積撤去後  
隅棟の宝珠が外れ、水煙が一部欠失していた。  
隅棟積は肌熨斗が少し残るのみで、大半が  
飛ばされていた。



図6 屋根瓦撤去後、上層、土居葺き  
雨漏り等はほとんど確認されず、土居葺き  
は概ね健全であった。



図7 瓦棧施工状況、上層  
空葺き用の縦棧取付け後。



図8 竣工、上層  
北面、西面に今回の補足瓦を集めた。



図9 真柱、相輪部分、金物撤去後。  
東に傾斜している。



図10 相輪金物、解体状況修理前  
錆が発生している。



図11 相輪、修理後（再塗装）



図12 宝珠止め金具、破損状況  
南蛮漆喰から出ている部分で鋼棒が細くなっており、  
台風により切断に至った。図15と比較すると、金  
属棒の先端付近が、著しく細くなっていることが  
分かる。



図13 宝珠止め金具、修理後  
切断部分から先を溶接した。



図14 昭和11年、工事写真  
宝珠止め金具修理後前  
2本の金属棒を栓で繋いでいるように見える。  
今回の台風同様、先端が切断されている。



図15 昭和11年、工事写真  
宝珠止め金具修理後



図16 昭和11年、古写真  
竣工写真、正面



図17 昭和11年、工事写真  
丸太組の素屋根